

C-5 集団活動に関する研究(Ⅰ) 児童学実践者養成について

お茶の水女大 須沢悦子

目的 1980年3月に児童学卒論生0名、4年生と指導教官のメンバーからなる児童学実践者養成の自主ゼミを発足した。この自主ゼミ活動において、本研究者は、監督的役割を自己養成のねらいとして担った。この活動を通して監督的役割の資質について明確にし、実践場面において役立つ。

方法 自主ゼミ活動(1980年3月13日才1回から7月5日才7回)において、活用した行為法心理劇と参観記録から分析し考察する。

結果 発展の節として促えられた活動をピックアップして考察する。発展の経過：
前期(①～②) — 新しい集団として人と物(課題)と出会い、各々の自己安定を回りながら、「今、ここで」ふるまう行為を体験認識する。
中期(③～④) — 児童学実践者養成をねらいとする活動に即して、リーダーチーム、役割機能、分担の理論、技法(ローリング、テクニク)を、心理劇により深める。

このような目的、経過を通して監督の資質について次にあげられる要素が大切であると考えられた。①メンバーの層を促え、どの人にも対応的に生かされるような内容、活動にする。②発展段階を促え、今、この集団において何が必要であるかを促える。③運営方法として、各々のねらいを明確にしながら集団レベルに位置付ける。④方向を明確にしなげらる、力関係を目立たせないで共に学ぶ状況設定をする。⑤全体状況を構造的に促え方向を作っていくことなど。